# 山岸徳平博士の物語研究一斑

## ――実践女子大学図書館山岸文庫蔵本奥書識語編年資料から――

横井　孝

前号[1]（本誌九一号）にひきつづき、本学図書館山岸文庫に蔵する一群の書冊についての紹介を試みたい。山岸徳平博士の研究対象は多岐にわたり、たとえば江戸漢詩については終生関心を持ち続け、蒐書も初期から晩年に至るまで見られるが、とりわけ著作の質量からも博士の研究の中核と見なしうるのが平安時代物語である。それを山岸文庫の蔵書――特にその奥書・識語から一望しよう、というのが本稿の目的である。

### 一　山岸徳平の著作から

戦前・戦後を跨いで、山岸徳平の著作活動は尾州家河内本を緒として、『源氏物語』を中心としたものであることは、容易に見て取れる。その略歴のなかから、以下に昭和一〇年以降の山岸博士の著述活動を簡略な表示によって概観してみよう（年号の「昭和」、西紀の「一九」を略す）。

一〇年（三五）12月　尾州家河内本源氏物語開題（尾張徳川黎明会）

一一年（三六）11月　河内本源氏物語研究序説（岩波書店）

一三年（三八）11月　源氏物語研究（島津久基と共著／新潮文庫／新潮社）

二二年（四七）10月　大鏡　上・下（古典文庫7・8／古典文庫）

二四年（四九）　桂宮本叢書刊行開始（監修／養徳

社）

二九年（五四）11月　堤中納言物語評解（有精堂）

三三年（五八）1月　源氏物語・一（日本古典文学大系／岩波書店）

三四年（五九）5月　平中物語・和泉式部日記・篁物語（日本古典全書／朝日新聞社）

7月　堤中納言物語・大鏡（編著／日本古典鑑賞講座第10巻／角川書店）

11月　源氏物語・二（日本古典文学大系／岩波書店）

三五年（六〇）2月　源氏物語・上（共編著／国語国文学研究史大成3／三省堂）

7月　八代集全註（八代集抄）（有精堂）

三六年（六一）1月　源氏物語・三（日本古典文学大系／岩波書店）

11月　源氏物語・下（共編著／国語国文学研究史大成4／三省堂）

三七年（六二）4月　源氏物語・四（日本古典文学大系／岩波書店）

11月　堤中納言物語全註解（有精堂）

三八年（六三）4月　源氏物語・五（日本古典文学大系／岩波書店）

12月　堤中納言物語（角川文庫／角川書店）

四〇年（六五）6月　源氏物語（一）（岩波文庫／岩波書店）

四一年（六六）2月　五山文学集・江戸漢詩集（日本古典文学大系／岩波書店）

四二年（六七）11月　源氏物語（五）（岩波文庫／岩波書店）

ここに表示した間の略歴として、昭和二九年（一九五四）に実践女子大学教授に就任、学長などを歴任して、昭和四六年（一九七一）退職、名誉教授の称号が与えられている。その後も、退職の年一一月の「和歌文学研究」（山岸徳平著作集Ⅱ／有精堂）を皮切りに、全五冊の著作集を上梓し、角川文庫『無名草子』、複製版『拾遺和歌集・寂恵本』、岩波全書『書誌学序説』、そして昭和六二年一月には待望の『近世漢文学史』（汲古書院）の刊行を待って、六月に亡くなっている。

省略したものもあるが、戦後の著述活動のあらましは以上のごときもので、平安時代物語を中心に、和歌・説話・軍記、そして近世漢文に至るまで、さながら山岸文庫の蔵書そのままに、幅広い関心と研究の実践の生涯であること

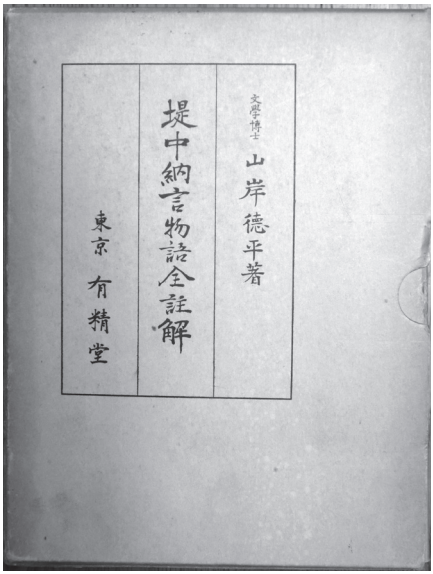
をあらわしている。

なかでも、『源氏物語』に関わる書を除けば、『堤中納言物語』についての著作が集中しているのを、ひとつの特徴として見出すことができようか（右の表示中、傍線を施した書）。『源氏物語』、近世漢文に並んで、『堤中納言物語』に対して、いかに山岸が愛着を持っていたかを物語る事実であろう。

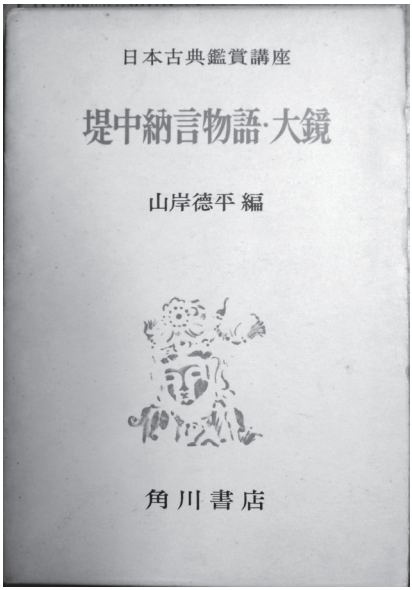
これに並行して、当該物語に関する主要伝本の現写本が山岸文庫に数多く蔵されており、そこにも前稿に示したような奥書・識語がのこされている。

これまた前稿で示したごとく、『堤』に限らず、さまざまな中古中世の物語類――『伊勢』『宇津保』『狭衣』『とりかへばや』『住吉』等々――の写本・刊本、さらに山岸博士の発見にかかる『とはずがたり』をはじめとして、単独の著作には結びついていないものの、『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『更級日記』等の日記についても蔵書のいくつかを数えることができるが、群をぬいて目を惹く『堤』の写本――現写本が中心になるが――について通覧するところからはじめよう。

【写真１】山岸『堤中納言物語評解』書影




【写真２】山岸『堤中納言物語全註解』書影




【写真３】　山岸編　日本古典鑑賞講座
『堤中納言物語　大鏡』書影

## 二　堤中納言物語の場合

『堤中納言物語評解』は、「新制大学の教養学部の学生のため、及び高等学校の生徒や、国文学を愛好する一般の人々のため」に書かれた、という（「はしがき」）。しかし、四六判ハードカバーの函装、七五〇頁という重厚な装いであった。[2] 刊行された昭和二九年という時期を考慮すれば、これはもう学習参考書というよりも、追随をゆるさぬりっぱな注釈書であったとすべきであろう。八年後に、「本書を読む前に」の一文や「参考文献」の一覧、各種索引が増補されたものの、版組そのままで『堤中納言物語全註解』が出版されたのもむべなるかな。

しかも、山岸の当該作品への思い入れの深さは、「堤中納言物語と私（＝山岸）との因縁、及び本評解刊行までの経緯」を九頁にもわたって説述した詳細な「後書き」にあり、当初『評解』への「後書き」であったものが、『全註解』の巻末にも転用されている（したがって『全註解』の「後書き」であるにもかかわらず、「本評解刊行までの云々」が遺されている）。

それによれば、山岸博士と『堤』との出会いは大正五年（一九一六）に遡るという。

松井（簡治）先生は「藤岡作太郎君も、東大で講読に（堤中納言を）使ったが、てこずった物語であるよ」と、わかり憎い事を話された。それでは、能くわからないのも道理と、私は聊か安心もし、同時に「能く読みこなして見よう」との念願をも強くした。古本の市に写本二冊を求めたが、写しはすこぶる悪い。やっぱり、日本文学全書本を見る事にして居た。その後、大正十三年四月以後、学習院に就任し、堀維孝教授の紹介で無窮会に通った。堀氏は無窮会の幹事であったし、この物語にも関心があった。その八月下旬、私は京大付属図書館本と、久原文庫本と、阿波文庫本の閲覧に

出かけた。

（七一三頁）

文中の「日本文学全書本」とは、一八九〇年代に博文館から出版されていた叢書で、当該物語は野口竹次郎編の第四編（一八九〇年五月刊）に「とりかへばや物語」「四季物語」と合冊になっている。本文といい校訂といい、現今ではさすがに顧みるべき余地がない。それでも大正年間には、この物語について批判的使用に耐えうるテキストが見あたらなかったのである。

山岸の蔵書は、昭和二〇年四月一三日の大空襲で焼失。享保廿年版『謀野集刪』（蔵書リスト番号四六八〇）には「空襲戰災焼失／不残一物云云」とあり、また、尾州家本『夢の通ひ路物語（巻三）』の現写本（三三五九）の奥書には、

此物語注解之事　先年徳川侯依嘱有焉
余得閑暇　随時進稿矣　然原稿等悉蒙戦
災而不余一物皈灰燼了矣　巻三亦焼尽再書写
追補、為六巻者也

と蔵書のみならず、原稿等の研究の素材も灰燼に帰したとある。ただし、幸いなことに、その「写本二冊」は戦火を免れ、現在、実践女子大学図書館の山岸文庫に蔵するところとなっている。その識語に、

**堤中納言物語　五六四〇**

〈上巻末・朱書〉
堤中納言物語二巻魯魚焉馬の誤字多くして読み
かたし。以善本可校合者也　　岸廼舎記す
〈下巻末・墨書〉
大正十年六月此書の筆者は清慎公家集と同人也
何人の物せしか

と見えているのがそれであろう。山岸本人の文章とよく対応している。

右の『評解』「後書き」に続けて、その後の山岸の足取りを追ってみよう。

阿波文庫探訪後、九月十三日、故乃木院長の命日で授業休止の午後、私は始めて図書寮に行った。最初に閲覧したのが、かねて念願の堤中納言物語である。図書寮の本は、どの写本一冊でも、文字と言い装幀と言い、善美を尽くしたもののみであった。霊元天皇御宸筆の歌集類もあり、後陽成天皇御奥書の源氏物語もあり、記録類には、その本人自記の原本も少くない。私は貴

覯、貴重の珍籍、良書、善本の宝の山に入って、全く驚喜千万、目がくらむ思であった。それから毎週必ず一日は、図書寮に通う事とし、それを永く続けた。ともあれ、私は桂宮本堤中納言物語に就いて校訂を試み、啓示せられた点も少くなった。（七一四～七一五頁）

昭和三年頃から、私は諸本の調査をした。その八月十七日付で、天王寺事務所から、明静院に関する返答が来た。それが、日本文学全書本の間にあって、偶然にも現存している。（七一六頁）

私は、堤中納言物語を昭和の初年、学習院高等科の国語科で使ったのが最初である。当時は、今よりもまだもっと私は未熟であった。最後は教育大学で、二十八年度に専門課目として使った。専門課目の演習には、余りいじめて学生に骨を折らせ過ぎたかと、追想して居る。（七一八頁）

この間、山岸は、京大探訪の折には清水泰と出会い、『狭衣』『堤』の研究を勧めてみたり、語釈で得心の行かぬ点について高橋貞一に実地踏査を依頼したり、山岸文庫本の奥書や識語に名を表す人物たちが、ここにも登場している。

次いで、山岸は、当時山梨県立図書館の館長だった三谷栄一の周旋で『堤』の調査結果をまとめる作業に入る。「昭和二十五年の夏」のことであるという。実際に『評解』が上梓されたのは、さきの略年表に示したとおり、昭和二九年一一月のことであった。

――こうした、「後書き」における追想とともに、山岸文庫所蔵の当該物語の奥書や識語の記載と見くらべれば、山岸博士の『堤中納言物語』研究の一斑を垣間見ることになるだろう。

## 三　山岸文庫本の奥書・識語

以下に掲げるのは、実践女子大学図書館に現蔵する『堤』における奥書・識語である。所蔵本のすべてではなく、あくまでも奥書等を有するもののみの一覧であること、お断りしておきたい。

四桁の数字は、山岸文庫の蔵書番号。それに拘わらず、年代順に配列した。ほとんどは「後書き」に名が見えるものを含む主要伝本の現写本であるが、一部江戸期の写本があり、そちらの奥書は省略する。

**堤中納言物語〔書陵部本の現写本〕三三二五**

異本堤中納物語（ママ）　写本一巻　旧清水浜臣蔵本也
蔵于宮内省図書寮
大正十四年三月令高野孫三郎氏書写畢頗存原
本之趣矣　五月七日於図書寮一校了
岸廼舎
異本堤中納言物語一巻別在静嘉堂文庫以他日須
校合者也　大正甲子蕤賓第七日　岸廼舎又識
同一系統本在無窮会　右三本殆無異同矣
昭和二竜集丁戌夾鐘下浣
於小石川大塚窪町僑居　又識岸廼舎

**堤中納言物語〔神宮文庫本の現写本〕五六三一**

堤中納言物語一巻　慈延上人頭書神宮文庫本也
昭和五歳次庚午二月上浣借覧焉以序書写者也
神宮文庫本天王寺明静院本也転写云云　明静
院本　今不知其所在也
昭和五年二月既望写畢一校了
岸廼舎識　』

〈以下朱書〉
堤中納言物語一冊以山岸先生御所蔵神宮文庫
影写本書写之功畢一校畢
本文者愚弟正道之影写也
于時昭和十一年一月十日記　正義識㊞

**堤中納言物語〔冨士谷本の現写本〕五六二八**

堤中納言一冊　松井博士蔵本也
二月上浣借覧之序於家中写者也
昭和十一年二月廿三日　朝
岸廼舎

**堤中納言物語〔大野本の現写本〕五六二九**

堤中納言物語一冊　松井博士蔵本也
今茲二月中浣借覧之序　書写者也
原本　大野広城自筆本也　嘱川角氏也
内閣本　矢野氏本　皆同系者云云
二月廿三日降雪窓下記之
明阿本云云
栗色云云有之。朱書之傍以墨―、書者即
示原本之栗色者也
〈朱書〉明静院ニ対校シテ、ソノ以外ノ朱ハ明阿↙
↙本ナリ可見合也
昭和十一年三月一日
〈墨書〉墨字之傍以藍書―者
元中二年巻物也　』

内閣文庫本 昌平坂学問所之黒印在表紙　浅草文庫本也
与松井本同一也

**堤中納言物語〔函碕文庫本の現写本〕五六三五**

堤中納言物語一冊　函碕文庫旧蔵本也
今在松井博士架上　二月上浣借覧之序
映写者也　誂小山子者也
昭和十一年二月廿三日
六花繽紛舞窓前之朝
岸廼舎識

**堤中納言物語〔直麿本の現写本〕五六三八**

堤中納言物語一冊　松井博士蔵日尾荊山自筆本也
荊山弱年日直麿云云　今茲二月上浣借覧之
序　書写者也　誂北野氏云云
昭和十一年二月下浣　岸廼舎

**堤中納言物語〔小山田与清本〕五六三九**

堤中納言物語一冊　峯問翁旧蔵本也　余数次借蔵本于
峯問翁矣　因翁遂為余所寄贈云云
昭和十一年十月十五日　岸廼舎

**堤中納言物語〔岩下本の現写本〕五六三四**

堤中納言物語　一冊　長野図書館蔵本也
藤田徳太郎氏借覧之序　余転借焉
誂人書写者也　浜臣系本文云云
昭和十五年四月中浣　識之
岸廼舎

**堤中納言物語〔広島師範本の現写本〕五六三六**

堤中納言物語　十冊　広島師範蔵本而　有栖川
宮家御本与本書全同者也
今茲林鐘上浣誂高師生書写畢
于時昭和十七年夷則十六　夜記之
岸廼舎識之

**堤中納言物語〔神宮文庫明静院本の現写本〕五六三二**

堤中納言物語一巻　慈延上人頭書　神宮文庫本也
昭和五歳次庚午二月上浣借覧焉以序書写者也
神宮文庫本　天王寺明静院本之転写云云明静
院本　今不知　其所在也
昭和五年二月既望書写畢一校了
岸廼舎識
〈細字朱書〉以上余之旧写本ナリ

〈墨書〉余之本為人所借失（戦災焼失也）故更補給者也
右本　片寄氏転写焉因借覧以再書写者也↖
↙〈細字朱書〉高師生徒ニ依嘱ス三章未了ナリ
昭和廿二年五月三日夜記之
虫めつる　程々の懸想　三章未了　』
灰すみ
未書了三章　今茲一月二日夜同三日午後書了　施朱↖
↙点者也
神宮文庫本　誤写頗多本也　只取巻序相違之点而已
（一行分空白）
余之本者昭和十一年春一月上浣貸片寄氏云云氏既
歿　今日転写本残存矣
昭和廿三年大簇三日黄昏綴終聊書付焉
午前訪問鯉之画伯古瀬素石氏　岸廼舎
于平河天満宮祠畔云云（【写真4・5】参照）

## 堤中納言物語〔九条家本の現写本〕五六二七

〈上巻各物語末尾〉
ハナサクラ
列帖三綴　一冊
九条公旧蔵本
昭和廿四年五月廿八日夜写了
墨付一三

白紙首一尾　有之
表紙一一　』
コノツイテ
列帖二綴　一冊
墨付十三　白紙（末三首一）　表紙首末一
昭和二十五年仲呂五　夜得少閑写了
原本、色々之紙ニ而書之矣今試
模　原本之色云云　』
ムシメツル　三括一冊
墨付二三白紙一四　表紙
四月十七日午後夜写了
岸廼舎
』
ホト〳〵ノ
列帖三綴　一冊
墨付十枚　白紙首一尾三、（ホト〳〵ノ三以下）
表紙首尾一一
昭和二十五年仲呂五六両夜写了
岸廼舎
今日春雨浪々

午前訪古谷氏
午後至蓬左庫
夢通路物語
巻三始書写
身世共匆忙云云

』

アフサカコエヌ　三括一冊
墨付一八白紙首一尾三　表紙一一
四月十七日夜十四枚
〃　十八日朝四枚写了
表紙ハスベテ本文ト同ジ紙、他本同様
昭和二十五年四月十八日朝記之
岸廼舎』

〈下巻各物語末尾〉
貝合　三括
墨付一六　白紙首一尾三　表紙一一
仲呂十一朝写了
昨夜見行成十番歌合于飯島
氏宅　新出未見巻子也
本願寺三十六人集頃　元暦校本万葉頃　歟
写藍紙万葉流者筆也
岸廼舎

』

（オモハヌカタニ）
列帖　一冊三綴
墨付　二四　白紙首一尾三　表紙首尾アリ
二括ノ端ニ**オモハヌカタニ**ニナシ
四月六日夜写了
点滴窓前不断
夜雨蕭々無風
岸廼舎
本巻有脱文一箇所云云

』

ハナタ
列帖　三綴　一冊
墨付二〇　白紙首一尾一　表紙一一
四月十四日余書之
今日和子学習院短大入学
発表也云云
十五日朝和子写了
十五日黄昏記之
岸廼舎

』

ハイスミ　三括　一冊
墨付二二　白紙首一尾三　表紙一一

四月十五日巻首和子写之
以下余入浴後写了十二時半
今日曇天冷気稍強云云
岸廼舎
』

ヨシナシコト　三括
墨付一三　白紙首一尾四　表紙一
四月十三日　夜写了
六年前今夜戦災云云
岸廼舎
（二行分空白）
九条家本者全部仮綴而未切紙端
故紙端有題名之片仮名書焉　不必良本也
』
十編物語（堤中納言物語）十冊
前田子紅梅文庫本也
（旧九条家蔵本而弘文荘
賈却云云）
昭和廿四年蕤賓中浣借覧
書写花桜一冊爾来学校
問題忙殺　荏苒到今日、四月
中浣求閑漸書写了
十冊本今夜便宜従流布本之
巻序、而合綴為両冊云云、
昭和廿五年四月十九日夜将垂
二更、家人不在、門前有来客之声、
不好半夜転青眸対俗人而黙
不出矣云云　岸廼舎
客即如去矣
』
昭和廿五年秋弘文荘書目中載
本書十冊矣　価格八阡金　不知
何人購求焉　十月十五日記之
十二月八日　与増淵臼田氏逢合
於蒼明、臼田氏語曰購求九条
家旧蔵堤中納言十帖矣云云
即今在臼田甚五郎氏之書架焉
十二月十二日記之

**堤中納言物語〔薩道本の現写本〕五六三〇**

堤中納言物語　二冊　英人薩道旧蔵本也
後為上田万年先生蔵　更転為
日本大学図書館蔵本云云
借覧　山田氏書写者也昭子写焉　昭和二十八年十一月三日
昭和二十八年十一月八日記之
岸廼舎識

**堤中納言物語〔神宮文庫本の現写本〕五六三〇**

堤中納言物語　一冊　神宮文庫本也
以山田忠雄氏転写本影写本也
昭和二十八年十一月十五日〈以朱記入（朱筆）〉
岸廼舎識

**堤中納言物語〔京大本の現写本〕五六三三**

堤中納言物語　京大図書館蔵本也
九冊本ほと〳〵の懸想一冊欠
各冊、堤中納言物語（このついて）と題簽有之
昨秋高橋貞一氏蔵写本借覧之際
転写者也　十一月写了
昭和二十九年蕤賓二日記之
岸廼舎

**堤中納言物語〔況斎本の現写本〕五六三七**

堤中納言物語　二冊　以山田孝雄博士蔵本（書写）焉
件本　岡本保孝旧蔵本也　昨冬依頼
一見而今夏借覧（云）昭子写了
七月下浣
昭和三十年八月十三日記之
岸廼舎識

**堤中納言物語〔藤井乙男本・一冊本〕五六三七**

藤井乙男 号紫影 淡路人 第四高教授
後京大教授、乙翁即藤井先生也
（余白に清水泰未亡人住所を書いた紙片貼付）
昭和四十四年十一月十九日
清水泰氏未亡人より　岸廼舎

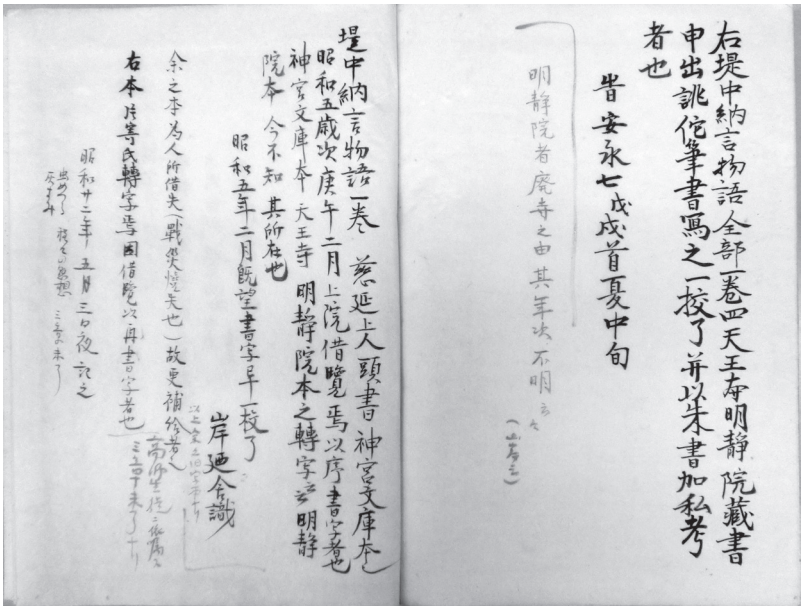
**堤中納言物語〔藤井乙男本・二冊本〕五六四三**

藤井先生旧蔵本也　為清水泰君未亡人所贈云々[3]
記念之書也　昭和四十四年十一月廿三日記之
岸廼舎識

次にいくつかの奥書の影印を掲げておこう。（27頁以下）

## 四　『夢の通ひ路物語』の場合

山岸文庫におさめる「国書」（図書館の分類）のうち、散文では『源氏物語』関連の典籍の占める割合が圧倒的ではあるが、それについては別に検討する機会があるだろう。『堤中納言物語』については、ここまで見てきたように、山岸博士が若年時から関心をもって、意識的に蒐書してきたために、右のような一覧ができるようになった。他にも、



右堤中納言物語全部一卷四天王寺明静院藏書
申出詣侘筆書寫之一校了并以朱書加私考
者也
旨安永七戊戌首夏中旬

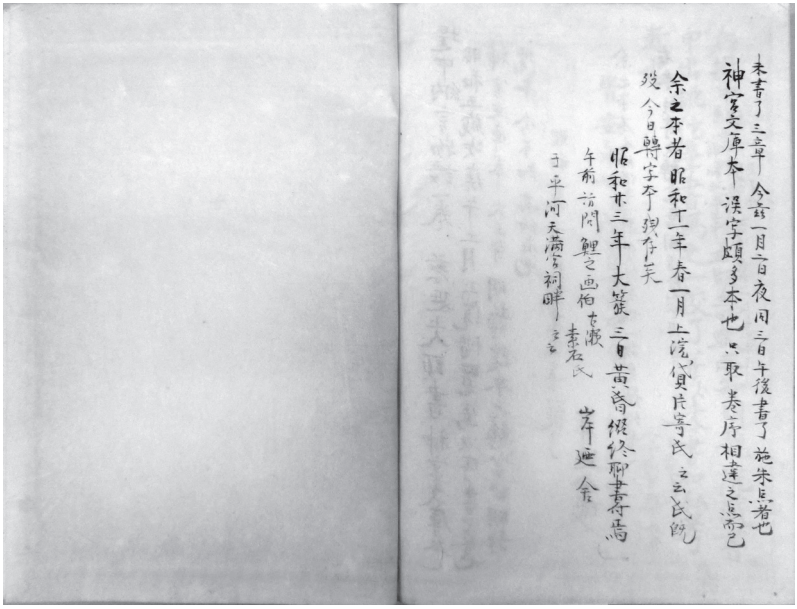
明静院者廢寺之由其年次不明云々
（山本）

堤中納言物語一卷　慈延上人頭書神宮文庫本
昭和五歳次庚午二月上院借覽焉以序書字者也
神宮文庫本　天王寺　明静院本之轉字云明静
院本　今不知　其所在也
昭和五年二月既望書字早一校了
岸連金識

余之本為人所借失（戦災焼失也）故更補給者
（以上金氏の記事十り）
（高橋生徒三名為）
（三ヵ月ヲ未了十り）

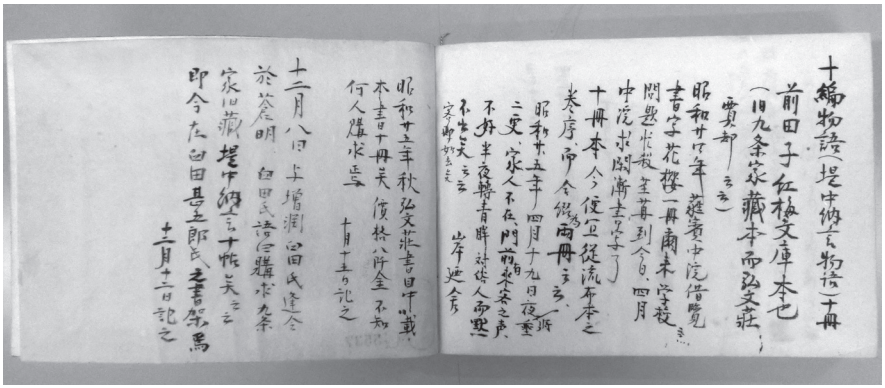
右本片岸氏轉写等因借覽以再書字者也
昭和十二年　五月　三日夜　記之
（出ヲ了　校ヲの意想　三ヵ月未了）

【写真４】明静院本・現写本奥書１

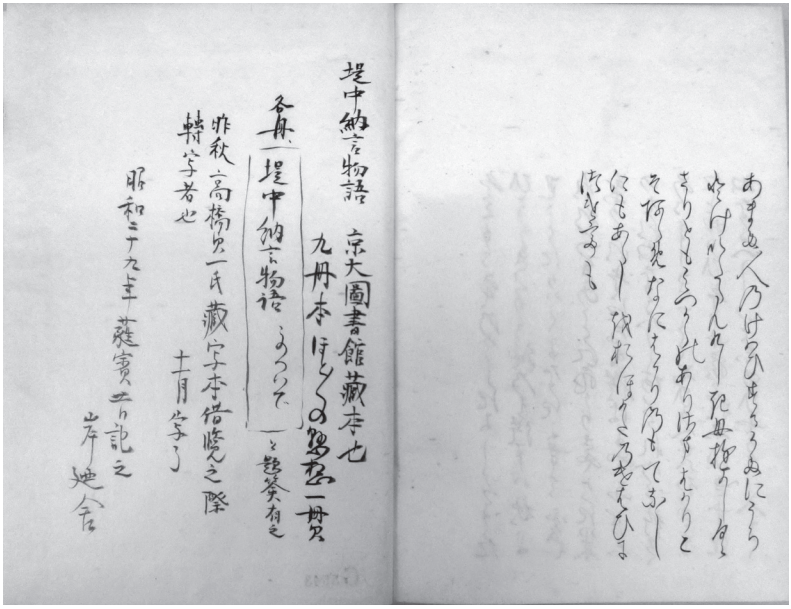


未書了三章一　今年一月二日夜同三日午後書了　施朱点者也
神宮文庫本　誤字頗多本也　只取巻序相違之点而已
余之本者　昭和十一年春一月上院　貸片岸氏　云云氏既
歿　今日轉字本了　現存矣
昭和十三年　大簇　三日　黄昏　終聊書寄焉
午前　訪問　鯉之画帖　古版　素石氏　岸連金
于平河天満宮祠畔　云々

【写真５】明静院本・現写本奥書２



【写真６】九条家本・現写本奥書



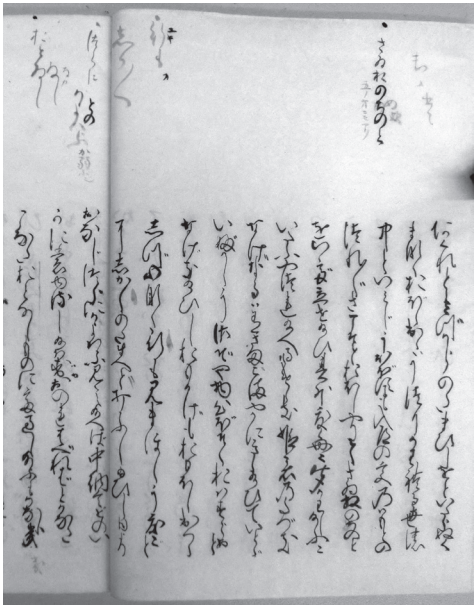
【写真７】京大本・現写本奥書

『住吉物語』『浜松中納言物語』『松浦宮物語』など複数の、それも多量の写本・現写本を備える注目すべき作品がないわけではないが、前稿で紹介した『とはずがたり』のように、かならずしも数量とは関わりなく注目すべき作品の現写本――その奥書・識語がある。そのうちの一点として、本稿の前々節にも一瞥した尾州家本『夢の通ひ路物語』の現写本（三三五九）について、あらためて言及しておきたい。

『夢の通ひ路物語』は、南北朝末期または室町初期の成立とみられている、いわゆる中世王朝物語のひとつであるが、蓬左文庫に現蔵する一本が知られるのみで、他に伝本を聞かない孤本である。昭和四七年に古典研究会から、発掘者ともいえる山岸徳平と平沢五郎の編で影印が刊行されている。[4] のち、三角洋一の編で『鎌倉時代物語集成・第六巻』（笠間書院、一九九三年五月刊）に翻刻が収められて、目にふれやすくなった。とくに後者『物語集成』の略解題に「原本を披見しても、難読の箇所が少なくない」とわざわざ記すほどなのだが、いかにも山岸博士が好みそうな素材である。『とはずがたり』の現写本の如く、山岸文庫本には毎頁に朱筆をもって本文校訂案をねっている様子がうかがえる。

次の〔写真8〕は巻一の巻頭近く。上部の余白（本来書本に頭註があるのをそのまま書写している）に本文校訂の試行錯誤のようすを見せているのである。

また、これも『とはずがたり』の際と同様に、各巻に詳細な奥書・識語を記している。



【写真８】『夢の通ひ路』巻１（部分）

**巻一**、題簽「夢通路物語一」

〈現写本一オ右裾〉

昭和五年書写時、写（未附写）

表紙裏〈補入「之紙。原本者―表紙ニ」〉而貼付〈補入「中」〉者也矣

巻四　同　廿五年八月卅日

巻五

巻三　表紙裏ニ

題字无也云云

〈一オ左肩細字〉

原本ハ

コノ一頁、表紙裏ニ貼附ケアリテ見エズ

後借用、家ニ持参ノ時　剥ギハナシテ写シタルモノナリ

〈巻尾〉

夢の通路物語六冊　尾州家本也

昭和五年九月上浣参候於冨士見町

之邸　而始書写者也　此一冊余自揮

禿毫影写残暑酷烈流汗淋漓於

腹背矣　九月五日十一時半―五時十三枚　岸廼舎

六日十時―四時十一枚

十九日五時写了

昭和廿五年五月十日於蓬左文庫一校、

〈朱書〉五月廿二日　一校了

**巻二**、題簽「夢能通ひ路物語二」〈巻尾〉

昭和廿五年五月廿九日卅日於蓬左文庫一校了

七月十九日再校　於　僑居云云

〈青墨書〉次日校訂

〈朱書〉八月廿四日〈朱書補入「就原本」〉三校〈了　藍点疑問修訂了

**巻三**、題簽「ゆめのかよひち物語三」〈巻尾〉

夢の通路物語　三　昭和廿年四月十三日戦災焼尽

同廿五年自四月上浣書写　得閑写若干葉至五

月八日朝写了　追懐二十年前則如夢幻泡影云云

昭和二十五年蕤賓五月十日浪々初夏夜雨

和風而窗前喧云々

岸廼舎

〈青墨書〉八月廿九日朝以藍一校了

〈墨書〉八月廿九日十一時二十分於

蓬左文庫、一校訂了

仲呂六日

七日金雨

八日　雨　十日

十五日〈青墨書〉十八日〈墨書〉二十二日

蕤賓二日自朝至夕刻二十四葉

四日木至五時半　残葉三

八日月写了

（一、二行分空白）

九月中浣図書寮製本　十月十三日製本出来持参

九条本堤中　二冊　夢通路巻三　一　』

新撰菟久波集巻一一　きりつほ　一

松風　一　佐古呂裳巻二　一（平瀬本）

延徳抄　一

作文大躰（童蒙頌韻）　一　讃岐下り水くらげ（句集）　一

九部十冊　以下

十月十五日朝記之

原稿焼尽、近年身葱忙

後日再起稿　又難哉、々々、可憾々々

（一行分空白）

此物語注解之事　先年徳川侯依嘱有焉

余得閑暇　随時進稿矣　然原稿等悉蒙戦

災而不余一物皈灰燼了矣　巻三亦焼尽再書写

追補、為六巻者也

（〔写真12〕参照）

**巻四**、題簽「夢通路物語四」〈巻尾〉

夢の通路　六冊　借用来而嘱高師生徒境野氏、於家

中書写焉

去九月以来至徳川邸書写未了

分為書写也

昭和五年十二月上浣　写了

岸廼舎

昭和廿五年七月廿一日強風自朝至夕一校了

〈朱書〉七月廿五日朝於蓬左文庫以来一校了

不審若干有之

**巻五**、題簽「夢濃かよひ路物語五」〈巻尾〉

巻五（前境野氏 後鳥谷部氏）筆　昭和五年冬十二月下浣

岸廼舎

昭和廿五年南呂六朝一校了　連日雨天今日稍見蒼空

〈朱書〉八月廿四日廿五日両日於蓬左文庫対校了

**巻六**、題簽「夢廼通路物語六」〈巻尾〉

巻六（巻首 巻尾）余書之　他、鳥谷部氏筆也

昭和五年十二月下浣也

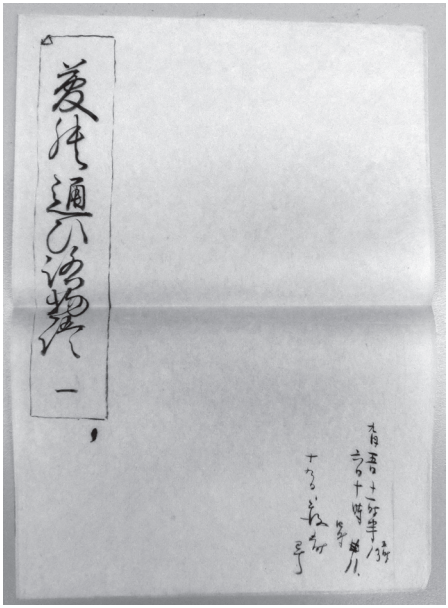
巻二

巻三　以感光紙撮影於富士見町徳川研究室、

巻四　境野氏└二十三日マデ加勢而冬期皈省
巻五　境野氏┈二月廿四日―廿六日　写了
　　鳥谷部氏　　廿四日―廿六日
巻六　鳥谷部氏　十二月廿六日廿八日拙宅宿↖
　　↙泊而影写也
依頼所三男氏而借覧皈宅、年末匆々之間書写也
　昭和廿五年七月廿一日黄昏記之　往事渺々↖
　　↙如夢／　岸廼舎
　廿三日一校溽暑不捗
　廿四日続校溽暑無風不捗
　八月三日夜一校了　　』
〈朱書〉八月廿五日廿六日両日午前中於蓬左文庫
　藍点之部分校了

これらを通覧するに、当初は山岸本人が書写していたものの、また、一部では巻頭・巻尾を本人が書写しつつも、手すきの学生の助力を得、それを蓬左文庫に足を運んで校正し直しているのであり、そうした現写本生成の状況が具に読み取れる資料なのである。

これら奥書等だけでなく、巻一・三・六などにメモとおぼしき紙片が挟み込まれている。たとえば次の〔写真9〕は、巻一の挟み込みの紙片のひとつで、反故を利用したものであろう、右下隅に書かれた文字を見れば、



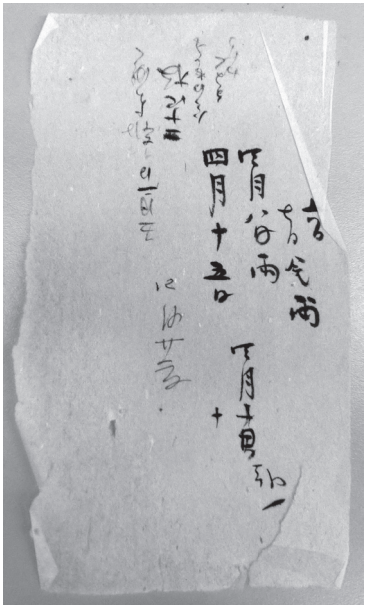
【写真９】『夢の通ひ路』巻１挟込紙片１

九月五日　十一時半13五時
六日十時　■　11、四時
十九日、午後五時畢

このように読める。現状ではこの紙片は巻頭付近に挿入されているけれども（近年後人の所為の可能性大）、巻尾の奥書本文と重なる。つまり、奥書のためのメモ、下書きなのである。

〔写真10〕もまた巻一に挟み込まれていた紙片。しかし、

前に掲げたように、巻三の奥書の一節と重なる。



【写真 10】『夢の通ひ路』巻1挟込紙片2

これも奥書のための覚書とみてよかろう。さらに次の〔写真11〕も同様。巻六に挟み込まれた紙片であるが、速筆であるものの、巻六の奥書の一部そのものである。

こうしてみると、

(1) 現写本に遺されている奥書・識語は「清書」されたものであり、ということは、

(2) 山岸博士は、奥書・識語を記録として残す意思が明確にあったこと、

(3) 〔写真9〕～〔写真11〕のようなメモが常態であったか否かは、いまのところ不明ながら、古典籍の購入、現写本の作成については、別に記録があったらしいこと、

などを挙げることができるのではないか。

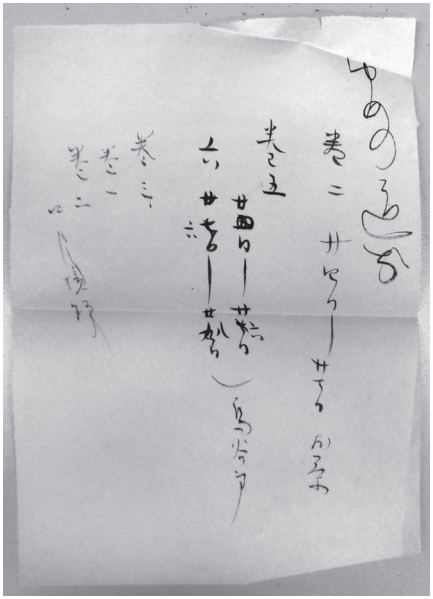
山岸徳平という研究者が「努力」と「熱意」のひとであったことについては別に述べた。[5] 一方でたぐい稀なenergeticなひとであったらしい。

前稿で紹介した『いはでしのぶ』を想起していただきたい。山岸が京大本に訪書した折のことである。

言はでしのぶ　一巻、京大蔵本也

昭和竜集庚午五年林鐘上浣誂人書写了

類本鮮少只蔵(見)前田侯 三条西伯両家各蔵一本蔵而已



【写真 11】『夢の通ひ路』巻６挟込紙片

昭和五年林鐘幾望　岸廼舎

いま、当該の『夢の通ひ路物語』もまた同じ「昭和五年」のこと。「九月上浣、冨士見町の邸に参候し、書写を始む」と巻一の奥書にあった。その仕事ぶりの連続性を発見したのは、前稿の感想をもたらしてくれた横溝博であった（私信による）。山岸博士が、こうした調査と旅行にいかに「熱意」を持ち、エネルギッシュな「努力」をはらっていたか、垣間見させる事実なのではなかろうか。

**注**

（1）横井「山岸徳平博士の現写本考――実践女子大学図書館山岸文庫蔵本識語編年資料から」（『實踐國文學』第九一号、二〇一七年三月）。以下「前稿」と略す。

（2）その後、「学生版」と銘打つ簡略版が出され、七五〇頁のフルバージョンは絶版となった。学生版は「本書を読む前に」「解題」を切り出し、さらに「後書き」も省略された三七〇頁仕立て。

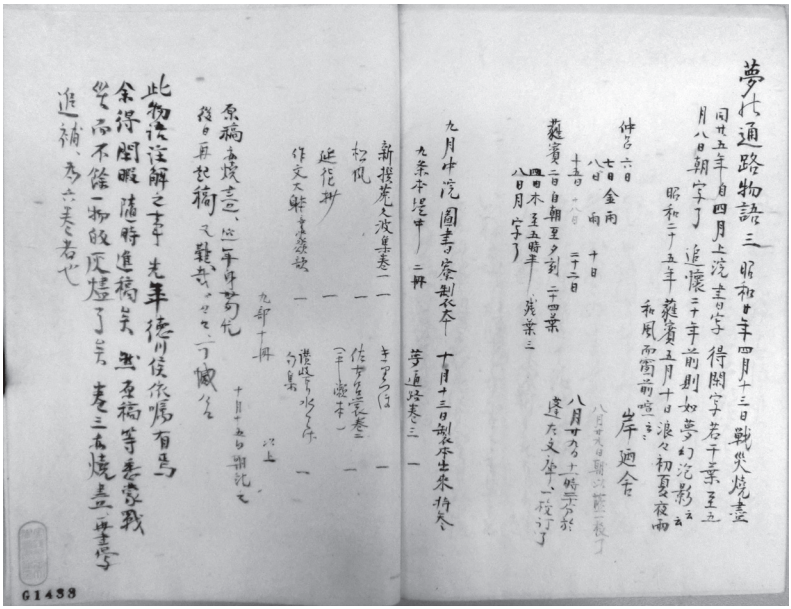
（3）一冊本《五六三七》・二冊本《五六四三》ともに、（二冊本は上巻）前遊紙ウラに「清水君／恵存　乙翁㊞」と墨書する。印記は「紫影」。

（4）古典研究会叢書・第二期『夢の通ひ路物語』山岸徳平・平沢五郎解題（汲古書院、一九七二年一〇月刊）。

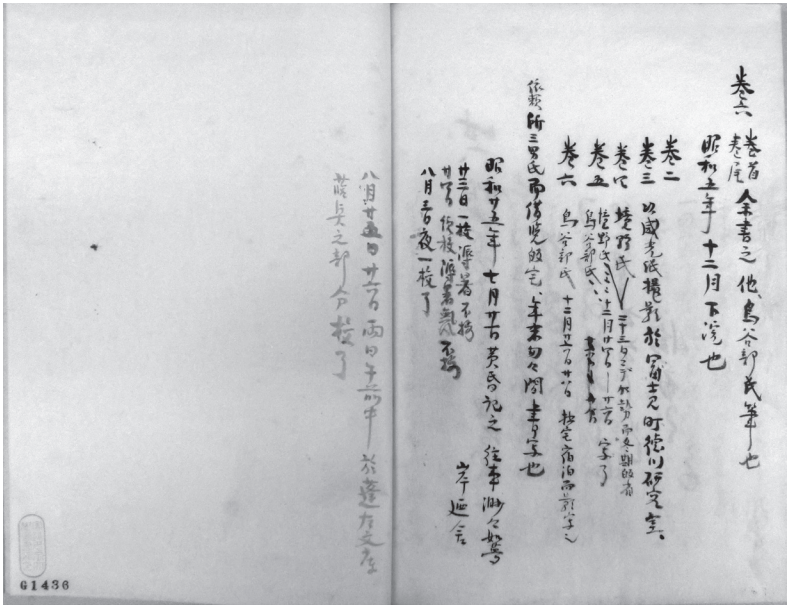
（5）横井「山岸文庫本、奥書・識語のなかの近未来」（『中古文学』第一〇〇号記念号、二〇一七年一二月予定）。

**付記**

本年（二〇一七年）六月一〇日、中古文学会関西部会で、本稿、さらに前稿と一連の「山岸徳平博士の『源氏物語』研究一斑――実践女子大学図書館蔵山岸文庫蔵識語調査から」という報告を行った。質疑の後の時間に、岡嶌偉久子氏より「奥書」「識語」というテクニカルタームの使用について注意を受けた。「書物の内容そのものの成立を示すもの」が奥書であるはず（堀川貴司『書誌学入門――古典籍を見る・知る・読む』勉誠出版、二〇一〇年三月刊）で、現写本の場合は正確には使い分けるべきだ、というのである。たしかに「識語編年集成」や前稿では、その点厳密さを欠いた。よって本稿副題のように修正して用いることとした。



【写真 12】山岸文庫本『夢の通ひ路』巻３奥書



【写真 13】山岸文庫本『夢の通ひ路』巻６奥書

## 付記　二

『堤中納言物語』研究は、山岸博士以来さほど進展のみられない分野であったが、近年小ぶりながらも好著が上梓されている。横溝博・久下裕利編『堤中納言物語の新世界』（武蔵野書院、二〇一七年三月刊）、後藤康文『堤中納言物語の真相』（武蔵野書院、二〇一七年四月刊）の二冊である。本稿は、これら新研究の可能性へのオマージュとして執筆した。

（よこい　たかし・実践女子大学教授）